

### (改善の具体的方策)

大学院修了後、何らかの方法で職業人としての知識や能力の向上を目指した継続教育のプログラムを開発していく。また、キリスト教の現在を知ることができるようなエクステンション・プログラムを検討する。

### 1.2.3.2 教育・研究指導のあり方

#### <2003年度に設定した目標>

今後とも、将来構想委員会を中心に、時代の変化や学生の要請を考慮に入れて、履修指導や研究指導に関して検討を続けていく。将来に向けての目標は以下のようである。

- ・履修指導体制を強化する。

学生の研究課題に関して、適切な履修が行えるよう指導する。

#### 【評価項目 6-2-3】 社会人学生、外国人留学生等への教育上の配慮

(必須要素) 社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮

### (現状の説明)

前期課程において、神学部から進学した学生には、その神学部教育との接続を意図して、神学部4年次の特殊研究演習で取り上げたテーマをさらに研究するよう指導しているが、社会人学生においては、神学ないしはキリスト教学を専攻してこなかった学生が多い。

これについては、神学部の導入科目を聴講するよう勧め、研究の基礎となる知識を修得するよう指導している。

履修に関する指導体制として社会人学生・外国人留学生へはその指導教員とともに、大学院教務学生委員が特に個別に面接を行っているケースも多い。

### (点検・評価の結果)

社会人学生において神学またはキリスト教学を修得していない者については、神学部科目聴講等の指導上、修了に3年を要することが多い。これについては、入学時に十分な面談を行うことでほとんどの学生は理解している。しかしながら、今後は修業年限の短縮をはかるためのカリキュラムを編成することが重要である。

外国人留学生については、指導教員や教務学生委員が、個別面談や研究演習での学生間の交流を進めることにより、学修意欲の維持向上が図られている。

### (改善の具体的方策)

前期課程のカリキュラムは、キリスト教学の基礎的な授業科目群を設置し、社会人学生がその課程修了に要する期間の短縮化を図る。

## 【評価項目 6-2-4】 研究指導等（学生の研究活動への支援を含む）

- （必須要素）教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性
- （必須要素）学生に対する履修指導の適切性
- （必須要素）指導教員による個別的な研究指導の充実度
- （選択要素）複数指導制を採っている場合における教育研究指導責任の明確化
- （選択要素）教員間、学生間及びその双方の間の学問的刺激を誘発させるための措置の適切性
- （選択要素）研究分野や指導教員にかかる学生からの変更希望への対処方策
- （選択要素）才能豊かな人材を発掘し、その才能に適した研究機関等に送り込むなどを可能ならしめるような研究指導体制の整備状況
- （選択要素）学生に対し、研究プロジェクトへの参加を促すための配慮の適切性
- （選択要素）学生に対し、各種論文集及びその他の公的刊行物への執筆を促すための方途の適切性

### （現状の説明）

前期課程入試出願時には、「研究計画書」を提出させている。また入学後、一年次の5月末に指導教員の研究指導の下に「研究題目」を、二年次では、「修士論文題目」を提出することを義務づけている。これらの過程を経て、10月に「中間発表会」を開催し、相互に司会や発表を行う。翌年1月に修士論文を提出し、2月の口頭試問を経て学位授与につき判定を行う。

後期課程では一年次に博士論文題目を提出させている。また、紀要などに掲載する論文の作成、学会での発表を積み上げていくよう指導を行っている。

大学院入学時において「論文・レポートの書き方」についての小冊子を配付し、在学中を通じてこれを基に論文指導を行っている。またこの小冊子は、例年若干ながら、内容の見直しを行っている。

### （点検・評価の結果）

前期課程入試出願時における「研究計画書」の提出は、教員が適切に研究内容を理解し、受け入れの体制を整える材料となると同時に、学生自身が入学後、主体性を持って研究に取り組むための一助となっている。また一年次の「研究題目」提出から、二年次の「中間発表会」に至る一連の過程は、指導教員がその研究内容を十分に把握し、それを研究演習の内容などに反映させるといった、適切な段階で適切な指導を行うことに寄与したシステムであると言える。

前期課程においては、学部教育からの連結（6年一貫教育）という位置付けで研究指導を検討することも必要である。一定の社会的経験を持って入学する学生も多い本神学部にあっては、基準を満たす優秀な学生は4年を待たず早期卒業するという制度の導入も検討されるだろう。その場合に大学院へ飛び入学し、続けて研究を行うという選択肢があり得ることを考慮に入れておくべきである。

後期課程においては、研究雑誌への投稿や学会発表の積み上げを、さらに具体的に展開させるための方法を検討する必要がある。

大学院入学時の「論文・レポートの書き方」の配布とそれに基づく指導は、学生がその指針を明確に把握する資料となっている。しかしながら、指針は世界的な標準に合わせて、常に見直す必要もあり、同時に冊子の内容もこれまで以上に細やかな整備が必要である。

### (改善の具体的方策)

前期課程においては神学部からの接続を考慮し、円滑に研究指導を行える体制を検討する。

後期課程における、学位（博士）論文作成に伴う支援策として、学会発表や研究雑誌への投稿などに対する補助制度を設け、在学中に論文2本、学会発表2回というような具体的目標を掲げるよう指導する。

後期課程は必ずしも研究者育成のみを目的とせず、牧師などの専門的職業に従事する者が、しばらくの間、職を離れて集中的に研究を行い、その成果を持ってまた職に戻るといった生涯学習の場として捉え、研究演習などの新たな指導体制を検討する。

### 1.2.3.3 教育方法のあり方

#### 【評価項目 6-3-1】 授業形態と授業方法の関係

(必須要素) 授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性

(必須要素) マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

(必須要素) 「遠隔授業」による授業科目を単位認定している大学・学部等における、そうした制度措置の運用の適切性

#### <2003年度に設定した目標>

今後とも、FDに関する研究会を中心に、時代の変化や学生の要請を考慮に入れて検討を続けていく。将来に向けての目標は以下のようである。

1. FD研究会を開いて、授業方法の改善に努める。
2. 効果的なマルチメディアの利用法について、研究を重ねる。
3. インターネットを利用した授業運営を研究する。

ウェブ上で資料を配付したり、提出物を受け付ける。また、掲示板を利用して質問を受け付けるなど、学生の便宜を考えた授業運営を研究する。

#### (現状の説明)

前期課程の授業は「講義」「演習」「実習」の各形態によって行われる。講義科目の履修学生数は20名前後であり、学生の発題に基づく討論など、単に講義に留まらない授業方法も積極的に取り入れている。また演習科目はいずれも10名に満たない学生で構成されており、教員と学生あるいは学生同士の十分な対話がなされている。

実習科目には主に夏期に集中して行う「教会実習」「臨床牧会実習」がある。いずれも10名弱の学生で構成される実践の場（教会および病院）へのインターンシップ科目である。過去3年度の履修者は以下のとおり。

年度	教会実習	臨床牧会実習
2004	9名	6名
2003	6名	6名
2002	5名	5名

後期課程の授業は「講義」および「演習」の形態がある。